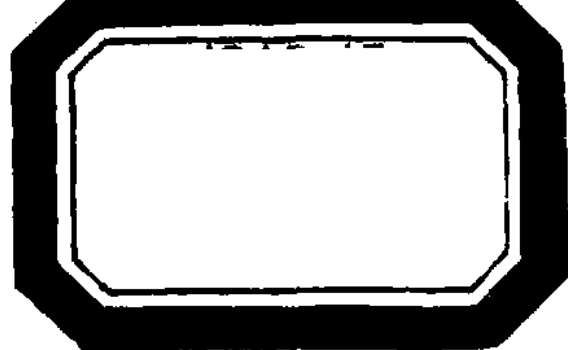


鬼の冠

津本陽

新潮文庫





おに 鬼 の 冠

新潮文庫

つ - 6 - 4



平成三年五月十五日 印刷
平成三年五月二十五日 発行

著者 津本 陽

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)三二六六五一
編集部(〇三)三二六六五四〇
振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社 製本・有限会社加藤新栄社

© Yô Tsumoto 1987 Printed in Japan

ISBN4-10-128004-5 C0193

新 潮 文 庫

鬼 の 冠

津 本 陽 著



新 潮 社 版



目

次

会津の小猿	九
般若の面	三
武者修業	三五
小天狗、西へ	四
異形の男	六
神との出逢い	七
大難	六
神性	二三
練胆の行	二九

惣角、北へ	一四
神技	一三
合気の神髓	一七
漂泊	一五
監獄部屋	二二
巡教の旅	三六
孤独の星辰	四四

解説 桶谷秀昭

鬼 の 冠

会津の小猿こざる

昭和三年八月、北海道あさひかわ旭川市三条通り、秋田屋旅館に、小柄こがらな老人が宿泊した。身長一五〇センチ足らず、瘦身そうしんで、年齢は七十歳というが、十歳は若く見え、眼光が異様にするどい。

彼は大東流合気柔術宗家、武田たけだ惣角そうかくであつた。惣角は全国の武道家のあいだに英名をとどろかせている達人であつた。

だが売名に意を用いず、自ら道場を構え、門人を養成する気がない異色の人物である。彼は国内各地を放浪し、足をとどめた地で合気の術を教える。

教授料は二円であつた。

秋田屋旅館の主人は、惣角の名を聞き、おそれいって丁重なもてなしをした。北海道では惣角は開拓時代の英雄として、知られていた。明治三十五年に、彼は単独で全道五万人の無頼漢に立ちむかつたのである。

明治三十年代の北海道は、新天地開拓の活況のうちに、博徒、無頼漢が横行し、犯罪者も多く、ほとんど無政府状態であつた。

全道の博徒が五万人であるのに対し、これを取締る警察官が六百人の少数である。このため警察署に保護を求めた者が、署長の面前で殺される。裁判所判事の家族が、白刃はくじんで脅迫されるなど、無法者の眼めにあまる暴状は募るばかりであつた。

当時惣角は仙台第二師団の武道教授であつたが、函館警察署の懇請によつて渡道し、北海道最大の博徒丸茂まるも一家と単身対決し、彼らを慍伏しやうふくさせた。

白刃をふるい迫ってくる博徒たちを、濡れ手拭ぬめぎい一本をふるい、手足を打ち折つて追いつたという、惣角の武勇伝は、秋田屋の主人たちが幼時に聞いた伝説となつていた。

惣角が旭川をおとずれたのは、ひさびさのことで、市中に彼の弟子はいなかつた。

「武田惣角が、秋田屋に泊つていゝというでねえか。もうたいした年寄りらしいが、一丁味を見てやるべえか」

惣角が挨拶あいさつに出向いた警察署の幹部が、さつそく地元の代議士坂東幸太郎に知ませた。

坂東はのちに旭川市長になつた人物であるが、ブルドッグの異名がついてゐるほどの魁偉かいゐな風貌ふうぼうの持主であつた。

彼は一刀流免許皆伝、大兵肥満たいひようの体軀たいくにふさわしい剛力である。米二俵を背負い、一俵を口にくわえ、両手に一俵ずつ提げ、五俵三百キロを楽々と運ぶ力業で、有名であつた。

彼は銘酒「男山」醸造元の山崎興吉、興造父子、上川空知署管内の草相撲大関宮野彦次郎、柔道家松田敏美、前菊太郎らを誘い、柔道道場松武館に惣角を招いた。

惣角は刺すような眼光に、ただものでない威厳をみなぎらせていた。単衣ひとえに紹袴ろばかま夏羽織を

つけ、小脇差^{こわきざし}をたばさんでいる。昭和の時代に、脇差を帯びているような人物は、ほかにはいない。

坂東は惣角と初対面の挨拶を交し、内心に軽侮の思いを禁じ得なかった。

「なるほど、これは千葉周作がかねていったような名人であろうな。いまは何ら力もない老いぼれだ。年齢^{とし}をとって小遣い稼^{かせ}ぎをしたいのであろうから、精々体を痛めないほどに相手をしてやろう」

千葉周作は、その著書『剣術物語』で語っている。

「神業をつかう名人といえども、手合せしてみれば、いうほどのことはないものだ。軽んずべきではなからうが、恐るべきでもない。人の噂^{うわさ}には偽^{いつわ}り多く、行つてたしかめてみれば、さほど眼をおどろかすことには、会わぬものだ」

惣角は読心の術をこころえていたので、坂東の心中を鋭敏に読みとっていた。

彼は坂東に話しかけた。

「君は聞くところによると、四斗俵五俵を運ぶ大力者^{だいきしや}のようだが、儂^{わし}がこの場に寝るから抱きあげてみてくれんか。儂は十三貫足らずしか目方がない。これしきの荷物は、君なら指先でもつまみあげられるだろう」

惣角は両腕を組んだまま、畳のうえへあおむけに寝た。

坂東は苦笑いをしつつ膝^{ひざ}をすすめた。

「先生、よろしゅうございますか」

「ああ、いいよ」

坂東は惣角の背に両手を差しこみ、抱きあげようとした。

いかようなふしぎの技があつても、重力の法則に変わりはない。この爺さんじいがどれほどしゃちよこばつたとて、抱きあげるのに何の苦もないはずだ。

こうして力んでいる小児のような年寄りに、恥をかかすのもかわいそうだから、持ちあげにくいふりでもしてやろうと、坂東は腕にわずかに力をいれた。

これはおかしい、と坂東は感じた。武道家である彼には、惣角の身に触れた指先につたわる鉄のような手応えておえが、ふつうではないと判つた。

彼は全力をこめ、惣角を抱きあげようとした。だが、惣角は微動もしない。全身が鉛の塊であるかのような重さである。

「こんなことが、あるはずがない。十三貫の体を、なぜ持ちあげられないのか。しっかりしろ」

坂東は一瞬、自分が正気でいるのであろうかと、疑った。

全身を震わせ、齒をくいしばって抱きあげようとするのに、惣角の身はまったく持ちあがらなかった。

坂東の友人たちは、はじめのうちは坂東が上手に芝居をしているのだと思い、笑いを押しこらして見ていたが、やがて真顔になった。

坂東のこめかみに青筋がうねり、玉の汗がにじみでている。双肩が瘡病おこりやみのようにふるえ

ているのは、渾身こんしんの力をふりしぼっているためであつた。

その場の者は、わが眼が信じられなかつた。痩やせこけた老人を、坂東がなぜ持ちあげられないのか。

坂東は鼻先から汗をしたたらせ、見栄みえも忘れて惣角の前帯を自慢の齒にくわえる。両手と齒で持ちあげようとするのだが、やはり惣角は動かなかつた。

坂東は必死で惣角を道場の真中にひきずりだし、帯、襟えりがみ、足などところきらわずつかんで、何としても膝のうえへ持ちあげようと、苦闘する。

彼は一時間ほどのあいだに、惣角をあちこち引きずりまわしたが、一寸と持ちあげることができなかつた。

精根つきはてた坂東は、汗を滝のように流し、畳に両手をついて頭を下げた。

「先生、私にはとても先生を持ちあげることができません」

坂東の顔はまっさおで、血の氣を失っていた。

惣角は起きあがっている。

「坂東君、あまり力がないな」

彼は口辺につめたい笑みを見せ、こんどは草相撲大関の宮野を手招いた。

「その相撲取り、この腕を思うがままに処分できるか」

宮野は一八五センチ、一五〇キロの巨漢である。

惣角が子供のような細い左腕を、まえに水平に突きだしたのを見て、顔に血をのぼせた。

（この爺い、妙な技を遣いやがるようだが、思いあがつていやがるな。よし、かわいいそうだが、肩の関節ぐらいは外してやろう）

宮野は殺気を顔にみなぎらせ、進み出ると惣角の腕を右手でつかみ、捻じあげようとした。「うーむ」

宮野は右手だけでは、惣角のほそい腕をひねられないと知ると、両手で引っぱり捻じまわす。

惣角は頃あいを見て、短い気合を発した。宮野の腰が浮きあがったと思うと、頭を下に巨体が宙に舞い、一回転して畳に叩きつけられた。

血相をかえた宮野が、片手を惣角にとられたまま起きあがろうとするところを、ふたたび投げられる。

惣角は正座したまま一寸も動かない。埃を舞いあげ、家鳴り震動させつつ、宮野は五、六回もつづけざまに前後左右に投げつけられた。

彼は必死で惣角ににぎられた手首をふりほどこうとしたが、外れない。惣角に抱きつき、押し伏せようとつかみかかると、とたんに投げられる。

ついに頭を打った宮野は、意識朦朧となつて畳に伸びてしまった。

「大関が、儂の腕一本を処分できぬとは情ないではないか」

惣角が笑いながら宮野を扶けおこしてやる。

坂東をはじめ、道場に居ならぶ武道家たちは、惣角に神を見るような視線を集めていた。

名利を追わず、生涯を放浪のうちに過してきた老いた武芸者の神技を眼のあたりにして、彼らは魂を奪われていた。

その夜、惣角は坂東たち新規の門人たちの招宴で、武芸心得の一端を披露した。

「僕は会津の御伊勢の宮の、神主の子に生れたが、生れつき体が小さく、小猿と呼ばれたものよ。しかし、読み書きよりも武芸が好きでう。剣術、槍術、相撲など武芸十八般はすべてを稽古した。とりわけ剣術は直心影流の榊原鍵吉先生の直弟子として、血のにじむ苦勞を重ねたよ」

坂東が聞く。

「それで合気柔術は、いつからおはじめになられたのですか」

惣角は笑って答えた。

「僕が大東流の允可を相伝したのは、明治三十一年五月十一日であつた。先代宗家は、旧会津藩家老西郷頼母改め保科近慮様だ。大東流は清和天皇の末孫、新羅三郎義光が始祖としてゐる。この道の歴史は古いのだぞ。古事記に載っている手乞いという、相撲に似た武芸が、合気陰陽道として宮中に伝えられた。合気の術は清和源氏に伝えられ、新羅三郎義光はその名人であつたのだ。義光は海内一の弓取りといわれる武芸の達人であつたが、笙の名手でもあつた。宮中で笙を吹き、白拍子の舞いにあわせるうちに、舞いの柔軟で変化に富んだ動きのうちに、隙のない無形の理のあることを覚り、合気の秘奥を大成したのだ」